



「E-NEWS むらやま」で検索または 右記QRコード から、バックナンバーも見ることができます。



スペシャリストが本音で語る 学校と地域の連携協働にかける想い

12月6日(金)開催の「第2回地域とともにある学校づくり研修会(兼)社会教育主事有資格教員等研修会」において、寒河江市立南部小学校長の**大竹純氏**、地域振興サポート会社まよひが企画代表の**佐藤恒平氏**より、「地域とともにある学校づくり」の実現に向けた具体的な取組について事例を提供いただきました。その後、お二人に村山教育事務所の原田正明社会教育課長を加え、「学校が地域と社会教育行政に求めるもの、地域が学校と社会教育行政に求めるもの、社会教育行政が学校と地域に求めるもの」をテーマに鼎談し、コミュニティ・スクールや地域学校協働活動をどのように推進していくべきなのかをそれぞれの立場で本音で語っていただきました。

学校に入り込み、そして巻き込むー

学校が地域に入り込むのは重要です。ただ、それと同じく

らい地域も学校に対してアプローチしていく必要があると考えています。地域は受け身ではいけません。コミュニティ・スクールの取組を通して、地域は学校の教育課程に関心を持ち、理解を深めていく必要があると考えています。朝日町立朝日中学校のコミュニティ・スクールの取組の一つであるスキマクラス 2.5組(※1)における活動では、地域が学校に入り込み、民間会社のノウハウを生かし、教職員の仕事をサポートしています。これまでの関係性にとらわれない新しい先生・生徒・地域との関係性を生み出しています。



佐藤 恒平 氏

問われる管理職の覚悟ー

今、学校は人手が圧倒的に不足しています。だからこそ地域の協力が必要です。し

かし教職員の中には、地域との関わりを負担だと感じている人もいます。職員室は急激な変化を嫌います。まずは、教職員の理解を少しずつ深めることが重要です。管理職自らが教職員へ理解を促し、地域に足を運び、地域とのつながりをつくるのが重要なのです。若い教職員の皆さんには、若者ならではの視点を活かして、地域との接点を見つけてほしいと思います。職員同士の対話、学校外の方との対話を通して、学校と地域それぞれの想いに気づくことができる教員になってほしいと思います。



大竹 純 氏

学校と地域が同じビジョンをー

地域には多方面で活躍されている方がたくさんいますし、学校

に協力したいと考えている地域の方もたくさんいます。そのような方々と学校が連携していくには、地域コーディネーターや公民館が関わり、学校と地域をつなぐ必要があります。学校と地域が同じビジョンを持って「地域とともにある学校づくり」「学校を核とした地域づくり」を目指して活動すれば、お互いがWIN-WINの関係になるはず。また、地域の学びは、必ず子ども達に還ってきます。表現・発信の場を創出し、地域が継続して学び続けることができる環境づくりも重要です。



原田 正明 氏

(※1)地域が積極的に学校に係わることを目指し、朝日町立朝日中学校内の空き教室に設置された民間企業のオフィス

授業の広場 ～日常の授業の充実に向けた実践紹介～

【算数・数学】寒河江市立陵西中学校 第3学年 単元：多項式

児童生徒の思考に寄り添う

生徒が数の性質を見だし、文字式を用いて証明することに粘り強く取り組み、課題を解決する力を身につけることをねらいとして授業を行いました。

$$1 \times 3 + 1$$

$$3 \times 5 + 1$$

$$5 \times 7 + 1$$

$$7 \times 9 + 1$$

生徒が左の計算を行った後に式や答えから気づいたことや、証明をする際のつまづきを取り上げる等、授業者は1時間を通して生徒の思考に寄り添いました。文字を用いた奇数の表し方では、 $2n-1$ 、 $2n+1$ と $2n-1$ 、 $2m+1$ の違いについて、生徒の理解は曖昧でした。授業者はこれを全体で取り上げ、生徒の理解を確認してから証明に進みました。また、2年生のときの学習を振り返ることができるようにデジタル教科書を準備する等、ICTを効果的に活用していました。

計算を行った後、生徒は、 $\bigcirc \times \triangle + 1$ は、 $\bigcirc + 1$ の2乗という性質に気付きました。そして、教科書やノート調べたり、他者の考えを取り入れたりしながら証明しました。シンプルな課題だからこそ、「なぜこうなるのだろう。」「いつも言えるのだろうか。」という生徒の「問い」から、証明につまづきながらも「解決したい。」と考え続ける姿につながりました。

児童生徒の多様な思考に寄り添い、深めるためには、授業での反応を予想し、それに応じた指導や支援を考えておくことが必要です。その際、課題解決に至らない理由を、解決方法のみではなく、算数・数学の本質から探ります。この授業では、例えば、文字を用いる意味や証明の必要性を生徒が理解して学習を進めているかということから考えます。算数・数学の学習内容について深く研究することや、日々の授業で児童生徒の姿を丁寧に見取ることが、より具体的な指導・支援につながります。

【外国語活動】村山市立大久保小学校 第4学年

単元：Unit 8 This is my favorite place. 「教えて！みんなのMy Favorite OO！」

コミュニケーションを行う目的や場面、状況に常に立ち返る

＜単元のゴールとなる言語活動＞

自分のことをよく知ってもらうために、自分のお気に入りのものについて、クラスメイトに話す。

児童が、単元を通して、言語活動に主体的に取り組むことができるように、目的や場面、状況に立ち返ることができる機会が設けられていました。



教頭先生の紹介のように、場所を加えて、詳しくしようかな。

クラスメイトの姿を見て立ち返る

自分のことをクラスメイトによく知ってもらうために、工夫したことをクラス全体で共有した後で、グループごとに紹介しました。

教師のモデルを見て立ち返る

教頭先生のお気に入りのもの紹介の動画を見た後で、児童は自分のお気に入りのもの紹介をしました。その後、自分の紹介の様子を端末に録画し、内容や表現を確かめました。

〇〇さんが使っていたI like～.を自分も使ってみよう。



主体的に学びを創る子どもの育成

～「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実～

＜講師：山形大学学術研究院(教育実践研究科担当) 教授 三浦 登志一 氏＞
＜協力・会場校：東根市立東根小学校＞

村山教育事務所指導課は、東根市教育委員会と東根市立東根小学校の御協力のもと、今年度より始めた、支援型『学校経営計画指導』を通して、学校の校内研究の取組を、半年間にわたって支援してきました。また、ここに至るまでに本研修会の講師を務めていただいた山形大学学術研究院 教授 三浦登志一先生から、『主体的に学びを創る子どもの育成』～「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実～について、複数回にわたり講義・演習をいただき、東根小学校の先生方と共に学んできました。その集大成として、公開授業＜国語・算数・総合・特支部会＞と三浦教授の講義を盛り込んだ第3回学習指導力向上研修会を実施しました。子ども達の姿には、教育事務所の【学校教育指導の重点】に掲げている、『自立した学習者の育成』のヒントがたくさんありました。



算数 教材研究の段階で、育みたい力や予想されるつまづきを整理し、思考を促す支援や課題解決を支える教材・教具等について検討した。それらの準備は、子どもの学びへの意欲を高め、積極的に考えたり、仲間の考えから自分の考えを深めたりしようとする姿につながった。

国語 教材に対する子どもの読みがズレていないか、つぶやきや話し合いなどからの見取りを基に、教える場面と委ねる場面を見極めるようにして、単元を構想した。また、子どもの見取りを基に、適切な言語活動を用いたことで、「子どもが自分の学びを組み立てる」ことにつながった。

研究 学年オープン教科部会にしたことで、系統性のある授業づくりをすることができた。その結果、教師の主体性が高まっている様子が見られ、子どもが主役の授業につながった。

【授業づくりの成果:指導主事より】



【参加者の振り返りより】

【支援型を受けての感想:東根小学校より】
☆学校研究に沿って、指導主事が関わってくれたので、職員が学校研究についての具体的なイメージを持つことができた。
☆教科部会に分かれたので、授業者だけではなく、同じ部会の先生方にもプラスになった。また、教科部会の設定を学校の希望に沿ってできたので、メリットが大きかった。



・ 子ども自身も、今自分たちがどの学びの段階にいて、次にどんなことを学習していくのかという見通しをもって学びを進めている様子が見られた。
・ 自立した学習者を育てるために、確かな子ども理解と教科の本質を捉えた教材研究の二軸が必要不可欠であることを再認識することができた。
・ 協働的な学びが土台にあり、授業者が個々を見取った学習課題や支援等が見られた。

☆県内の小・中学校および教育委員会より110名の先生方から御参加いただきました。

・ 個別最適な学びには、教師の子どもへの深い見取りが不可欠であると学んだ。
・ 校内の先生方が他の学級へと関わりを広げ、人の役に立つという相手意識を喜びにしながら、子どもが主体的に行動できている姿に多くのことを学んだ。

村山教育事務所指導課は、先生方の授業づくりを伴走者として寄り添いながら支援していきます。これからも、子どもの笑顔と明るい未来のために、共に進んでいきましょう。

☆来年度も村山教育事務所指導課は、全力で支援させていただきます☆

第2回 教育相談関係研修会 令和6年12月9日(月)

各市町の教育相談に携わっている皆様にお集まりいただき、教育相談活動の一層の充実を図るための研修会を行いました。



発達障がいがある児童生徒の理解と支援 山形県立保健医療大学 名誉教授 佐竹 真次 氏

【成功体験の積み重ね】「ちょうどよいハードルの課題」+「支援」⇒「成功」⇒「承認」+「賞賛」という経験を、継続的に積み重ねる。

【ちょうどよいほめ言葉】「よい点数が取れてよかったね。今度はもっといい点数を取ってね。」は期待過剰なほめ言葉。「よくできたよ。」「うれしいよ。」「ありがとう。」「よく頑張ったね。」「できると思ってたよ。」等は、良き行動の直後のちょうどよいほめ言葉。

【うまく生きていく自信】人が社会に適応して活動するために必要なことは、うまく生きていく自信である。だから、学校の中では、教育課程以外のところでも、あるいは学校以外のところでも、その子のよいところを十分に認め、努力してもできないことは叱らず、その子が活躍できる場をたくさん用意する。そうすることで育成される自尊感情や社会性が、うまく生きていく自信になる。

＜参加者から＞

- ・ 発達障がいだからといって、一生ハンディキャップがあるわけではなく、その子が自分らしく生きられるように、私たちは援助しなければならないと思いました。また、生き方の選択ができるように情報を提供し、希望を持ってトライできるよう支援していきたいと思います。(市スクールソーシャルワークコーディネーター)
- ・ 「みんなと一緒に、みんなと同じに」を求めすぎて、子どもを追い込んでしまっていたような気がしました。佐竹先生のような優しい視点を持って対応していきます。(県子どもふれあいサポーター)

いっしょにさがそう! 第1回村山地区子どもの読書活動推進講座 見て聞いてさわって!絵本ハンターシーズンⅢ

11月24日(日)、山形県立図書館こどもエリアを会場に開催しました。東北文教大学の児童文化部の皆さんによる季節の絵本の読み聞かせやエプロンシアター、大型絵本や紙芝居、点字書籍や大活字本の紹介を通して、親子で多様な本や読書の形と出会うきっかけとなりました。県立図書館の中庭のどんぐりや流木、折り紙などを自由な発想で組み合わせたものづくりも行われ、親子で時間いっぱい楽しみました。

この日は特別!お話の世界に誘うかのように、中庭にフルートとピアノの音色が響きました。

折り紙をどう折ると作れるのか一緒に本で調べてみよう!



ブースをめぐる絵本をめくったりして自分で選んだキーワードを探してビンゴを目指しました。

保護者の声
・ 小さいうちから絵本に親しむことで本を読むのが当たり前の日常になるような習慣づけができたらいいいのかなと改めて感じました。
・ YouTubeなどの動画やスマホゲーム、携帯型ゲームに負けてしまうので、どうしたらいいか答えを求めてやってきました。工作に夢中になっていたので、家でもやってみたいと思います。
・ お兄さんもお姉さんも子どもたちにやさしく自然に触れあってくれました。またぜひ参加したいです。